

あん馬における「ドリッグス」の成立判定に関する一考察

中谷太希¹⁾, 村田憲亮¹⁾, 杉野正堯²⁾, 安田健人²⁾, 山下龍一郎³⁾

A study on succeed judgement “Driggs” on the pommel horse

Taiki NAKATANI, Kensuke MURATA, Takaaki SUGINO, Kennto YASUDA, Ryuichiro YAMASHITA

【Abstract】

When I used an establishment standard shown in the newsletter for the campaign for the progress of this study, which is aimed at “Driggs”, it was to clarify the umpire of one kind of the Japan Gymnastic Association official recognition, an establishment judgment, and the grounds and the establishment point of reference. As a result, the unevenness that occurred in the criteria became clear while I met you whether “a clear hop” was seen in an umpire focusing most. Few players can express “a clear hop,” and this suggests a delay of the technology development if I return the other side. Conversely, you should not bring in that I say with “both hands simultaneous support” in the establishment condition of rule words called based on the way of expression of being various, and it is thought that you should proceed through enforcement deduction as deviation from an eidolon. It is thought that the background in which the establishment condition called “a support for both hands at the same time” was established newly and that the criteria about “a clear hop” are not unified as having become clear in this study, although a stipulation is not done about the process as the cause. Moreover, in addition to “Driggs,” it is thought that it is related that “simplification” promotes “the depersonalization” of the marking rule. However, the problem of the aforementioned street clearly occurs and should be excluded from an establishment condition when “both hands simultaneous support” are brought into the establishment condition.

Itself prescribed “the judgment in the exercise progress of the skill” about the establishment standard called “the clear hop” that the unevenness occurs for a judgement result in the current situation and cannot delineate the success or failure definitely. Conversely, the originality of the skill called “Driggs” is not found when it is clear to carry a function of the distinction of the skill similar to “Driggs,” and the establishment condition called “a clear hop” takes away this establishment condition.

Hence, in the practice spot of the coaching, it is thought that it is necessary to push forward technology development even if anyone sees it to judge it with “a clear hop.”

Keywords: driggs, techniques, hop

【要旨】

本研究の目的は「ドリッグス」を意図して実施した運動経過に対し、Newsletterに示された成立基準を用いた場合、日本体操協会公認1種審判員がどのような判定を行うのか、成立判定及びその根拠となる成立判断の基準はどのようなものであるかを明らかにすることであった。その結果、審判員が最も重視するのは「明確なとび」が見られるかどうかであった。しかし、その判定基準にはばらつきが生じていること

¹⁾ 鹿屋体育大学

²⁾ 鹿屋体育大学大学院

³⁾ 九州共立大学

が明らかとなった。一方、〈とび〉の表現の仕方は多様であることを踏まえれば、「両手同時支持」ということを〈とび〉という規定詞の成立条件に持ち込むべきではなく、あくまで理想像からの逸脱として実施減点等で対処すべきであると考えられる。コーチングの実践現場においては、誰が見ても明らかに「明確なとび」と判定できるような技術開発を進めてゆく必要があると考えられる。

キーワード：ドリッグス, 技術, とび

I. はじめに

体操競技の採点は FIG（国際体操連盟）が定めた Code of Points（採点規則）に基づいて行われる。現行の2017年版採点規則（日本体操協会, 2017）では、演技の難度価値に関する D スコアと演技の完成度に関する E スコアの合計によって得点が算出される。個々の技は難易順に A 難度から I 難度まで定められており、競技会で優位に立つためには難しい技を高い出来栄で実施することが要求される。それ故、新しい技を演技に組み込むためには新しい技だけでなく演技全体の完成度が担保されている必要があり、実践現場においてはトレーニングが要求されることになる。

採点競技である体操競技において、実施した技が選手の狙いよりも低い難度価値で認定される、あるいは完全に不認定になるといった技の成立判定に関わる問題が生じることが少なくない。例えば、選手が鉄棒において D 難度の「伸身トカチェフ」^{注1)}（日本体操協会, 2017）という技を意図して実施したものの、審判員に屈身姿勢であると判定された場合には、C 難度の「屈身トカチェフ」（日本体操協会, 2017）と認定される場合があげられる。体操競技の技の技名は、〈宙返り〉^{注2)}や〈ひねり〉、〈旋回〉といった運動の基本形態を規定する「基本語」と〈支持場所〉や〈向き〉といった運動の細かな内容を規定する「規定詞」から構成される（金子, 1974）。選手や審判員は、基本語と規定詞から構成される技名からその技の運動課題、すなわち技の成立課題を判断し、トレーニングや採点活動を行うことになる。

一方、技名に示された基本語や規定詞について審判員や選手、指導者の間で共通認識が得られ

ていないことや、実際の競技会で生じた技の成立判定の問題事例などを発端とし、FIG から世界各国へ向けて技の成立判定に関する補足情報等が Newsletter として配信されることが通例となっている。その一つが本研究で取り上げるあん馬の「縦向きとび前移動（馬端～馬端）（ドリッグス）」（日本体操協会, 2017）（以下、「ドリッグス」とする）（図1）という技である。本研究においては、この技の成立条件として Newsletter に示された内容について、技の成立判定における採点実務上の問題点を明らかにし、成立条件の整合性について検証することを目的とする。



図1 「ドリッグス」の全体経過図
（日本体操協会, 2017, p. 83, 技番号41番より転載）

II. 「ドリッグス」の成立条件

1. 「ドリッグス」の概要

本研究で取り上げる「ドリッグス」という技は2017年版採点規則において、「グループⅢ. 旋回移動・転向移動技」の技番号41番に位置付けられ、このグループの技では最高難度である E 難度に位置付けられている（日本体操協会, 2017）。この技は、FIG 公式サイトに掲載されている暫定版の2022年版採点規則において F 難度に格上げされる予定となっている（FIG, 2021）。このことからトップレベルの選手を中心に、今後実施が増えてくることが予想される。

2. 採点規則及び Newsletter に示された「ドリッグス」の運動課題と成立条件

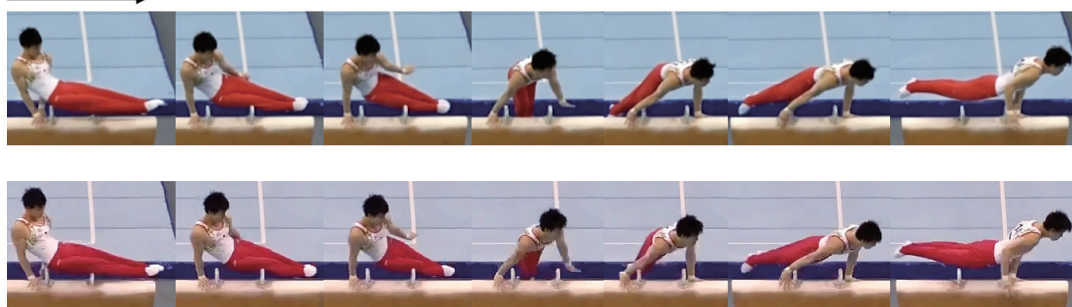
ここでは「ドリッグス」という技について, 採点規則に示された「縦向きとび前移動 (馬端～馬端)」という技名に基づいて運動課題を考察してゆきたい。この技は縦向き旋回をベースにして〈前移動〉を行い, 馬端中向き支持から馬端外向き支持へと支持場所を移すことが運動課題となる。このように前移動を伴う技には「縦向き前移動 (3/3: 馬端—把手—馬端)」(日本体操協会, 2017) や「縦向き前移動 (3/3: 馬端—把手—あん部馬背—把手—馬端)」(以下, 「マジャール」とする)(日本体操協会, 2017) などが採点規則の難度表に位置付けられている。これらの技は, 馬体上のどこに支持して移動するかという視点から区別がなされている。「ドリッグス」の場合には, 「とび」という規定詞が付されていることから, 馬端中向き支持から1回の〈両足入れ〉もしくは〈両足抜き〉の間に両把手をとび越えて馬端外向き支持へと移動することが技の運動課題となる。馬体上の支持区分という技の分類基準のように誰が見ても一目瞭然な客観的なもの場合には, 技の成立判定における混乱が生じることは少ないであろうが, 「とび」のように運動の形態的特徴を示す規定詞の場合には, その程度差は無数に存在することになる。そのため, 「とび」のような形態的特徴を規定された技の成立判定に関する採点実務上の問題が生じることが少なくない。こうした状況を踏まえ, 2018年1月に Newsletter

#33 が発行され, その邦訳版である男子体操競技情報26号『難度判定及び演技実施の確認事項と FIG 通達』(以下, 情報26号別冊とする) が2018年3月に発行された。そこには, 「明確なとびの後, 両手同時正面支持を示した場合に E 難度と判定し, それ以外は D 難度 (Ⅲ-46: マジャール移動) とする」と示されている (日本体操協会, 2018)。この内容を要約すると, 「ドリッグス」という技の成立条件は「明確なとび」, 「両手同時支持」, 「正面支持」の3つということになる。これらの条件を満たすには, 馬端中向き背面支持から〈両足抜き〉の間に明確なとびを伴って反対の馬端馬背へ移動し, 両手を同時に着手して馬端外向き正面支持になるという運動経過が要求されることになる^{注3)}。

3. 競技会における「ドリッグス」の成立判定について

K 大学の A 選手は2017年4月から「ドリッグス」を演技に取り入れ, 当面の間は国内外の試合において難度認定されていた。しかし, 2018年3月15日から18日にかけて行われた FIG 種目別ワールドカップ・バクー大会 (以下, AGF 杯とする) において, 予選では E 難度で判定されたが, 決勝では「No hop. (とびが見られない)」という理由で「ドリッグス」は不認定となり, D 難度として判定された。予選と決勝の運動経過を比較しても明確な違いはないと考えられる (図2)。このように同一大会において同程度の実施に関する判

運動方向
→



予選 E 難度

決勝 D 難度

図2 A 選手の AGF 杯の予選と決勝のとび局面の比較 (上: 予選, 下: 決勝)

運動方向
→図3 A選手とB選手のとび局面の比較^{注4}

定結果が異なった背景には、この大会において予選と決勝とで審判編成が変更となったことが関係していると考えられる。この判定を受け、A選手と指導者は、「ドリッグス」を意図した運動経過を行っても審判員によって難度判定が変わってしまうのであれば、失敗リスクの低い「マジャール」に変更するのが得策と考え、演技構成を変更することを決めた。情報26号別冊が発行された後、国内大会で「ドリッグス」を行う選手がほとんどいなくなったが、2020年9月に行われた全日本シニア大会においてB選手によって実施された。B選手の実施した運動経過は「ドリッグス」として認定されたが、A選手とB選手の運動経過を比較しても「明確なとび」の程度に大差はないように考えられる（図3）。このようなことから、筆者は上述のNewsletterに示された技の成立条件の成立、不成立の判定について審判員がどの程度の実施に対し、どのような評価を下すのかということをも明らかにする必要があると考えた。また、審判員の成立判定基準はどの程度統一されたものであるかどうかということについても検討する必要があると考えられる。

そこで、本研究ではA選手およびB選手を含む「ドリッグス」を意図して実施した運動経過に対し、日本体操協会公認1種審判員がどのような判定を行うのか、成立判定及びその根拠となる成立判断の基準はどのようなものであるかということ調査することとした。

Ⅲ. 調査の流れ

1. 映像の選出

今日の競技会において「ドリッグス」を実施している選手は極めて少ないのが現状である。そこで、「ドリッグス」の運動課題を概ね達成していると筆者らが判断した実施について、練習場面の実施を含めて映像を収集することとした。映像は、真横から撮影されており、運動が明確に把握できるものを選出した。収集した5名の映像の内、4名が〈抜き側〉から撮影した映像、1名が〈入れ側〉から撮影した映像である（図4）。本来であれば撮影の方向を統一すべきであるが、すでに現役を引退した選手の映像も含まれるため、1名の映像については〈入れ側〉から撮影したものをを使用することを断っておきたい。

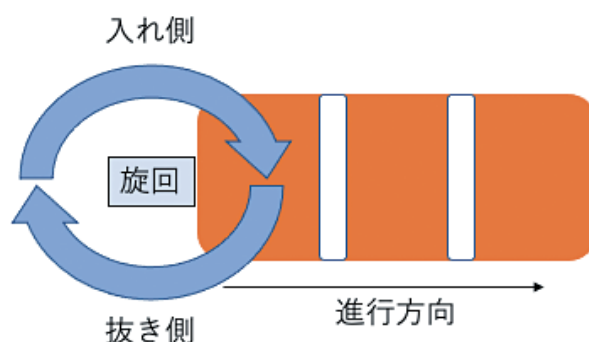


図4 撮影の向き

習得者に対しては、本研究の十分なインフォームドコンセントを行い、同意を得た上で調査を実施した。入手した映像から作成した連続写真は以下の通りである（図5～9）。

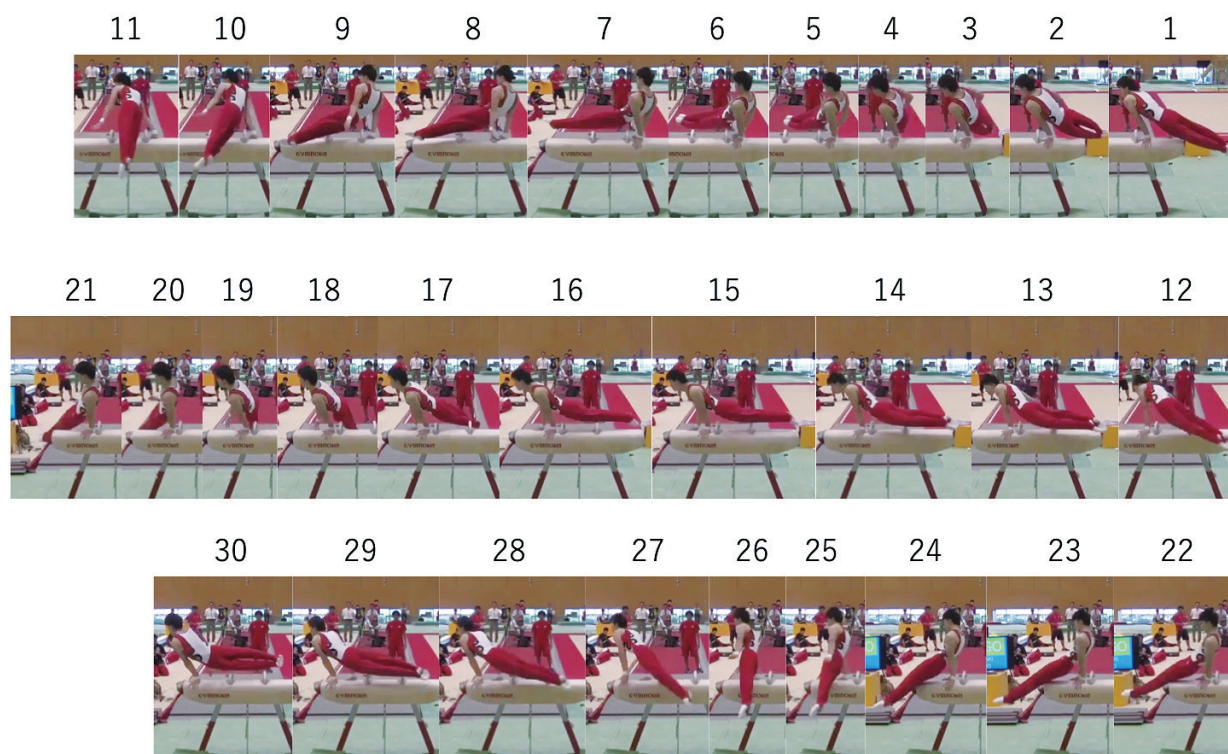


図5 対象者 A の全体経過図



図6 対象者 B の全体経過図

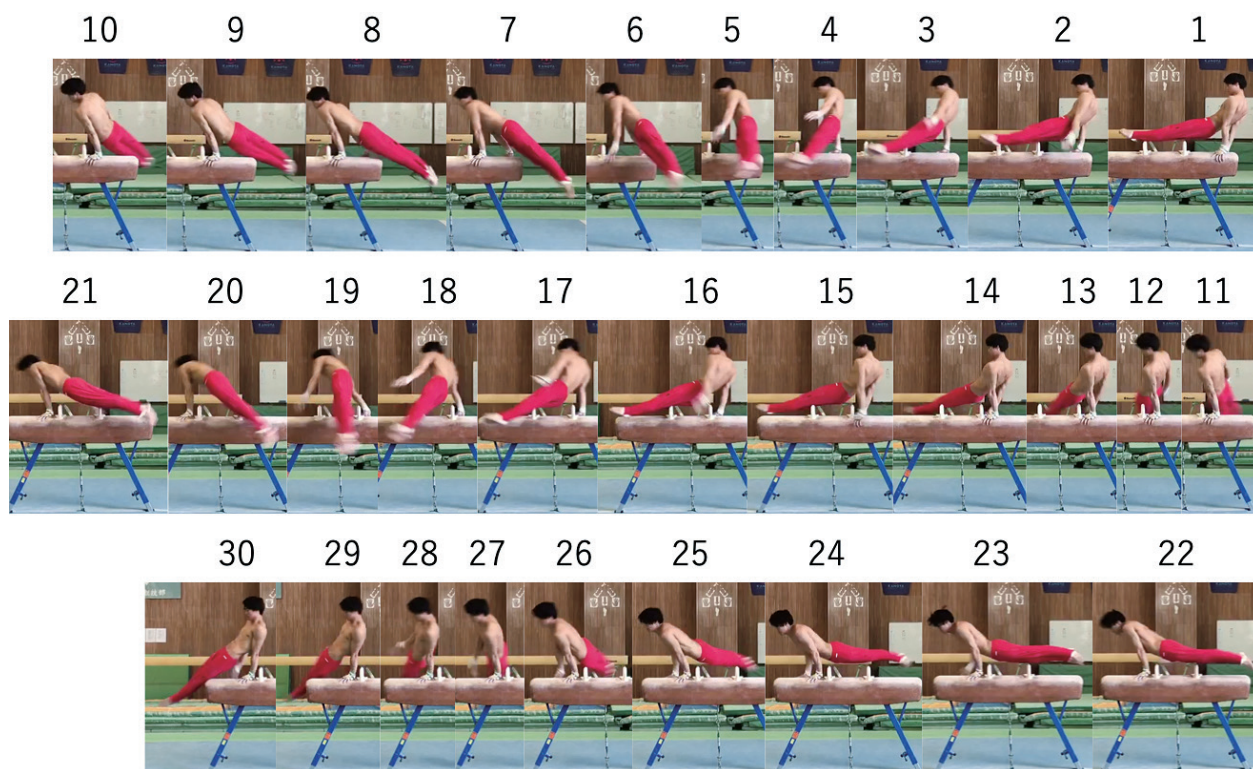


図7 対象者Cの全体経過図

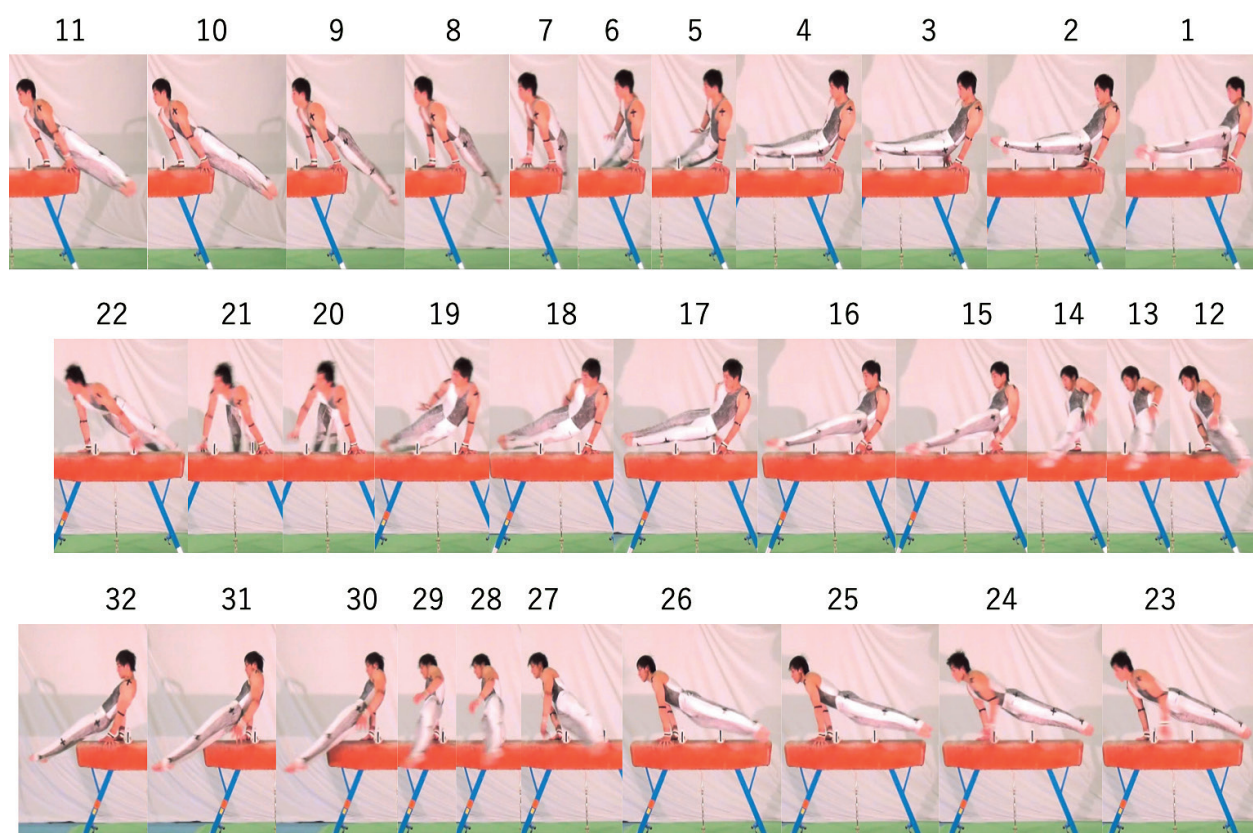


図8 対象者Dの全体経過図

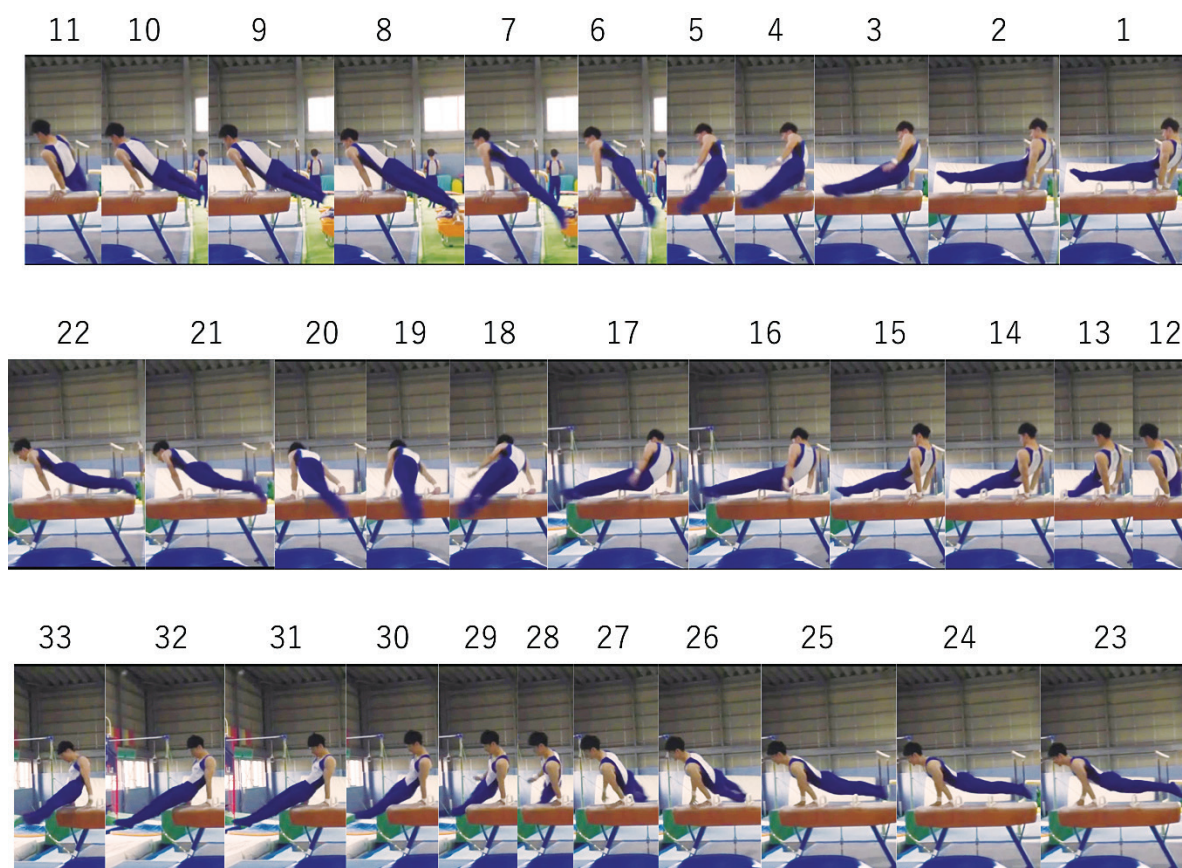


図9 対象者Eの全体経過図

2. 審判員の選出

本調査を依頼した審判員は表1に示すa～fの6名である。表1に示した「カテゴリー」とは、日本体操協会公認1種審判資格の中でランク分けされるものであり、最高ランクがカテゴリーⅠであり、続いてカテゴリーⅡ、カテゴリーⅢの順となっている。本研究で調査を依頼した審判員の全員が全国大会規模の審判経験を有するものである。

表1 審判員のプロフィール

審判員	カテゴリー	審判経験
a	Ⅰ	全日本選手権大会
b	Ⅰ	全日本選手権大会
c	Ⅰ	全日本学生体操競技選手権大会
d	Ⅱ	全日本学生体操競技選手権大会
e	Ⅲ	全日本シニア体操競技選手権大会
f	Ⅲ	全日本学生体操競技選手権大会

3. 調査方法

対象者より入手した映像については、「馬端外向き旋回（1周）～〈両足入れ〉～〈両足抜き〉

を行い、反対の馬端外向き正面支持～馬端外向き旋回（1周）」という運動経過になるよう編集を施した。調査方法については、各選手の実施映像を3回続けて視聴し、映像が終わった段階で一時停止して技の成立判定とその理由等について調査書に記入するという流れとなる（図10）。調査書の内容は、技の認定、最終的な判定理由、Newsletterに示された「明確なとび」、「両手同時支持」、「正面支持」の3つの成立条件に関する3段階評価とその判定理由である。3段階評価については、十分である場合は「○」、どちらとも言えない場合は「△」、不十分である場合は「×」を記入するものである。調査書には、これらの項目に関する回答例を添えることとした（表2）。

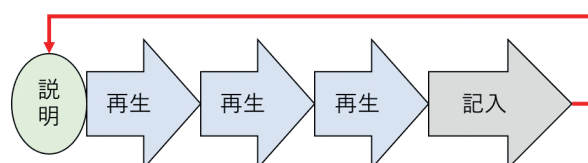


図10 回答の流れ

表2 調査表

対象者	認定	最終的な判定理由を記入して下さい	成立条件	成立条件の判定理由
例	○	「とび」と「両手同時」は明確ではないが、E 難度で判定してもいいレベルだと感じたから。	とび	両手が離れている局面は確認することができるが、 明確にとびを表現しているとはいえない。
			△	
			両手同時	両手とも、片方ずつとも言い難い。
			△	
			正面支持	正面支持で身体を支えてから、両足入れを行なっている。
			○	
A			とび	
			両手同時	
			正面支持	
B			とび	
			両手同時	
			正面支持	
C			とび	
			両手同時	
			正面支持	
D			とび	
			両手同時	
			正面支持	
E			とび	
			両手同時	
			正面支持	

IV. 結果と考察

各審判員の判定内容は表3にまとめた通りである。ここでは、上述のFIGが示した「ドリッグス」の成立条件を「明確なとび」、「両手同時支持」、「正面支持」という3つの視点に分け、それぞれの審判員の判定とその理由について考察を加えていくこととしたい。また、審判員によって上述の3つの成立条件のうち、どれを優先したのかということについても考察を進めてゆく。

1. 「明確なとび」に関する審判員の見解について

「とび」の項目について○の回答が得られたのは、対象者Aと対象者B、対象者Dのそれぞれ1件ずつであり、いずれも「成立」の判定であった(表3)。

各審判員の「とび」の判定理由に関する回答結果から、審判員a・b・c・fの「明確なとび」の有無を判定する指標は「両手が離れている局面があるか」ということで一致していると考えられる。それに関わらず、対象者Aと対象者Dの実施に対するこの4名の判定結果は○、△、×に割れている(表5)。このことから、審判員によって「とび」が十分と感じられる基準にばらつきが

表3 難度判定と成立条件の結果

対象者	審判員	判定	成立条件		
			とび	両手同時	正面支持
A	a	×	△	△	○
	b	×	×	×	○
	c	○	○	×	○
	d	×	×	×	○
	e	○	△	△	○
	f	×	△	△	○
B	a	×	△	△	○
	b	×	×	×	△
	c	×	×	×	×
	d	×	×	×	○
	e	○	○	△	○
	f	×	△	△	○
C	a	×	△	△	○
	b	×	×	×	○
	c	×	×	×	△
	d	×	×	×	○
	e	×	△	△	○
	f	×	△	△	○

対象者	審判員	判定	成立条件		
			とび	両手同時	正面支持
D	a	×	△	△	○
	b	×	×	×	○
	c	×	×	×	△
	d	×	×	×	○
	e	○	△	△	○
	f	○	○	△	○
E	a	×	△	△	○
	b	×	×	×	△
	c	×	×	×	×
	d	×	×	×	○
	e	×	△	△	△
	f	×	△	△	○

表4 成立判定とその理由

対象者	難度	審判員	最終的な判定理由
A	○	c	両手同時着手は見られないが、とび、正面支持、において十分な実施と感じたため。
		e	とびと正面支持は不足しているが、認定できるレベルであるため。
	×	a	技名は「とび (with hop)」という表記だけだが、この技に関しては特別に E 難度認定の条件として、「明確なとび」と「両手同時着手」が必要と強調して情報に示されている。それらの条件が明確ではないため。
		b	明確な「とび」動作が見られないため。
		d	技の課題となっている「とび」及び「両手同時正面支持」がいずれも明確ではないため。
		f	認定できない形の中では 1 番惜しいが、「とび」及び「両手支持」が不十分であるため。
B	○	e	両手同時ではないが、十分 E 難度で認定できるレベルであるため。
	×	a	技名は「とび (with hop)」という表記だけだが、この技に関しては特別に E 難度認定の条件として、「明確なとび」と「両手同時着手」が必要と強調して情報に示されている。それらの条件が明確ではないため。
		b	明確な「とび」動作が見られないため。
		c	とびが見られず、総合的にすべての要素が不十分に感じたため。
		d	技の課題となっている「とび」及び「両手同時正面支持」がいずれも明確ではないため。
		f	全体的にスムーズで流れは良いが、「とび」及び「両手支持」が不十分であるため。
C	×	a	技名は「とび (with hop)」という表記だけだが、この技に関しては特別に E 難度認定の条件として、「明確なとび」と「両手同時着手」が必要と強調して情報に示されている。それらの条件が明確ではないため。
		b	明確な「とび」動作が見られないため。
		c	支持は見られてもとび動作が不十分であるため。
		d	技の課題となっている「とび」及び「両手同時正面支持」がいずれも明確ではないため。
		e	とびが不足しているように見えるため。
		f	片手ずつの印象が強いため。
D	○	e	とび姿勢が不足しているが、認定できるレベルであるため。
		f	両手が離れた局面が見られたため。両手が同時に入れば理想系に近い。
	×	a	技名は「とび (with hop)」という表記だけだが、この技に関しては特別に E 難度認定の条件として、「明確なとび」と「両手同時着手」が必要と強調して情報に示されている。それらの条件が明確ではないため。
		b	明確な「とび」動作が見られないため。
		c	とび動作が見られないため。
		d	技の課題となっている「とび」及び「両手同時正面支持」がいずれも明確ではないため。

対象者	難度	審判員	最終的な判定理由
E	×	a	技名は「とび (with hop)」という表記だけだが、この技に関しては特別に E 難度認定の条件として、「明確なとび」と「両手同時着手」が必要と強調して情報に示されている。それらの条件が明確ではないため。
		b	明確な「とび」動作が見られないため。
		c	とび動作が曖昧で、移動後の正面支持の向きもズレがあるため。
		d	技の課題となっている「とび」及び「両手同時正面支持」がいずれも明確ではないため。
		e	すべての項目において少し不十分であるため。
		f	両手支持までのスピードが速いため認定の可能性もあるが、「とび」及び「両手支持」が不十分であるため。

表5 「明確なとび」に関する審判員の判定結果

対象者	審判員	判定	成立条件	
			とび	
A	a	×	△	左手を前方の馬端に着手すると同時に、右手を移し始めている印象が見て取れ、「明確なとび」といえるほどの空中局面は見られない。
	b	×	×	離手から着手にかけて、両手が離れている場面が確認できないため。
	c	○	○	一瞬ではあるが、両手が離れている局面があると感じる。
	d	×	×	明確に「とび」を表現しているとはいいい切れない。
	e	○	△	「明確なとび」は表現できていない。
	f	×	△	明確にはとんでいない。
D	a	×	△	左手を前方の馬端に着手すると同時に、右手を移し始めている印象が見て取れ、「明確なとび」といえるほどの空中局面は見られない。
	b	×	×	離手から着手にかけて、両手が離れている場面が確認できないため。
	c	×	×	とび局面が見られない。
	d	×	×	明確に「とび」を表現しているとはいいい切れない。
	e	○	△	「明確なとび」は表現できていない。
	f	○	○	両手が離れた局面が見られる。

あり、判定にもばらつきが生じたと考えられる。

一方、このことは本研究で取り上げた実施がいずれも「明確なとび」を表現したものではなく、技の成立判定が審判によって分かれる曖昧で不完全なものであったことを示唆するものである。本研究で取り上げた実施はいずれも国内選手の実施であったが、国外の選手についてもそれは例外ではなく、誰が見ても明らかに「明確なとび」を表現している実施は、この技の開発者であるキューバの Abel Driggs Santos 選手に限られる。この技が今後普及してゆくためには、Driggs 選手の実施を参考に、技術開発に関する研究が進められる必要があると言える。

2. 「両手同時支持」に関する考察

(1) 審判員の見解について

対象とした実施において、「両手同時」という

判定基準に対して○と判定した審判員は一人もいなかった。しかしながら、対象者 A に対して 2 件、対象者 B に対して 1 件、対象者 D に対して 2 件が成立という判定を行なっている。例えば、対象者 A に対する審判員 c の「両手同時着手は見られないが、とび、正面支持において十分な実施と感じたから」という判定結果は、「両手同時」は不十分でありながら、総合的に判断し技を成立と判定したということになる（表 4）。このことは、「両手同時」という成立基準に対して完全ではないものの、許容範囲内と見なし、判定を下したものと考えられる。このように、各技に対する成立基準を完全には満たしていないものの、許容範囲内と見なして成立の判定を下すということは珍しいことではない。例えば、「屈腕伸身力倒立」や「伸腕屈身力倒立」の場合、「力」という運動の規定詞が付されているため、振動を利用することな

く「力」によって運動を行うことが技の成立条件になっている。しかし、実際の採点実務においては、選手が僅かに振動を利用して技を実施した場合、それを許容範囲内と見なし、技自体が不成立になるということではなく、「実施減点」（日本体操協会, 2017）で対処されるということが採点規則に明記されている。このことから、体操競技の世界において、技に示された成立条件を完全に満たしたものでなくとも、ある程度の逸脱であれば許容範囲内と見なされ、技の成立判定が行われることは極めて一般的なことであると言える。このことから、「ドリッグス」という技の「両手同時」という成立基準についても許容できる範囲かどうかという考え方が持ち込まれることに問題はないと考えられる。

(2) 「とび」の成立条件に「両手同時支持」を持ち込む問題性

体操競技の技の構造体系論に関して世界的に著名な金子の『体操競技のコーチング』における「技の構造」（1974）において、技の構造を明らかにする拠点としてどんな運動形態を形づくるべきかというその技の課題性をみる「運動形態的構成要素」という考え方が示されている。ここでいう「運動形態とは運動経過の空時的・力動的実施形態を意味する」ものであり、例えば、「ドリッグス」という技に示された「とび」という用語は、技の運動経過におけるさばきの課題を明示するものであり、運動の空中局面の有無について規定するものである。さらに、金子（1974）は運動形態的構成要素に基づく技の構造は、細かな運動経過の違いを捨象して「図式的」に考察する必要があることに言及している。これらの考えに基づいて考えた場合、上述のFIGが示した「両手同時正面支持」という「ドリッグス」の成立条件は、「とび」という規定詞の成立判定を考える上で妥当なものであるだろうか。例えば、水たまりをとび越えるという運動の場合、立ち幅とびのような運動とは異なり、そっとまたぎ越すような運動とな

る。この場合、足は地面から片足ずつ離れ、片足ずつ着地することになる訳であるが、その運動経過には確かに空中局面を伴う「とび」が生じることになる。それでは、「ドリッグス」という技をこのまたぎ越しのように、明確な「とび」を伴って片手ずつ移動させた場合、この技は「両手同時」に支持していないという理由で不認定となることに問題はないのであろうか。また、またぎ越しという形態が可能であることを踏まえ、「とび」ということの成立判定基準に「両手同時支持」ということを持ち込むことは妥当ではないと考えられる。確かに、渡辺（1993）の言うように、両足系の技が生き残ってゆくための条件として、実施の難しさに応じた難度価値が与えられることと、技の運動課題の達成の仕方が脚先の回転力を維持できる技術条件であることは重要であり、そのためには片手ずつ素早く移動させるよりも、両手を一気に移動させる方が有利であり、両手を一気に移動させることによって必然的に「とび」が生じることになる。両手を一気に移動させるということが理想像として追求されるべきであるという考えに異論はないだろう。一方で、両手同時支持かどうかということが技の成立判定基準に持ち込まれた場合、AIによる自動採点システムの導入が検討されている現状を踏まえると、AIによる判定の精度が向上すればする程、精確に両手同時支持をするという形態は成立し得ないことになる。本論はAIによる自動採点の導入に対する是非を論じるものではないが、同時かどうかということを判定することに関しては人間よりも機械の方が精確であることは間違いなく、スロー再生などのビデオ判定を用いてより精密に成立判定を検討した場合、「両手同時支持」という形態は成立し得ないことになる。Newsletterに示された「両手同時支持」ということと、渡辺の言う「両手を一気に移動」ということについて、前者が技の終了の仕方だけに焦点があてられたものであるのに対して、後者は「とび」という規定詞の意味する運動の徴表を的確に言い表したものであり、これらは

決して同義ではない。「とび」という規定詞で表記される「ドリッグス」という技の理想像を考える場合には、渡辺のいう「両手を一気に移動」という形態を据えるべきであると考えられる。

「とび」という規定詞を用いて表記される技に「後方とび車輪1回ひねり」（以下、「クースト」とする）（日本体操協会, 2017）がある（図11）。「クースト」の成立条件として採点規則には「ひねりを伴うとび倒立技は、とび局面でひねりを開始しなければならない。ひねりが完了した後に2番目の手でバーを握らなければならない。ひねりが完了していれば片手ずつ握っても構わない」（日本体操協会, 2017）と規定されている。「クースト」の他にも「とび」という規定詞を用いて表記される技が採点規則に記載されているが、「ドリッグス」を除く全ての技において片手ずつの支持が認められており、技の成立判定に関わる「とび」という規定詞の判定基準に「両手同時支持」ということは規定されていない。何故、「ドリッグス」の「とび」の判定にのみ「両手同時支持」ということが持ち込まれるのかということについては十分な根拠が示されていないのが現状であると言える。

以上から、またぎ越しのように片手ずつ移動させる形態であっても明確な「とび」を表現するこ

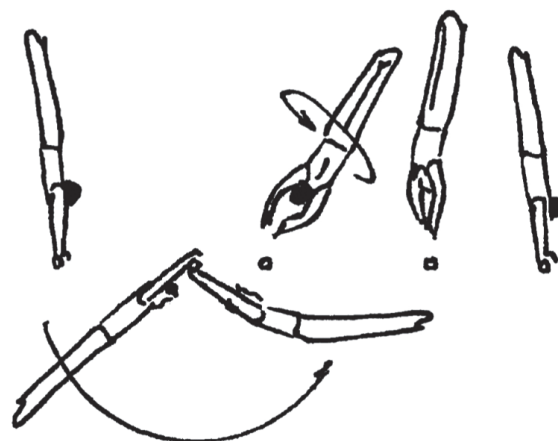


図11 「クースト」の全体経過図
（日本体操協会, 2017, p. 192より転載）

とが可能であること、精確な「両手同時支持」ということは成立し得ないこと、他の「とび」と表記される技の成立条件を踏まえれば、「ドリッグス」のように「とび」が規定されている技の成立基準として「両手同時支持」ということを持ち込むべきではなく、あくまで理想像からの逸脱として実施減点で対処すべきであると考えられる。

3. 「正面支持」に関する審判員の見解について

「正面支持」という判定基準については、23件が○、5件が△の判定であり、×という判定は僅か2件であり、とりわけ対象者Aの実施については全審判員が○の判定であった。

表6 「正面支持」に関する審判員の判定結果

対象者	審判員	判定	成立条件	
			正面支持	
B	a	×	○	正面支持をしてから、両足入れを行っている。
	b	×	△	正面支持の際に馬体に触れているが、手に体重が掛かり支持をしているとは言えず、不明瞭な実施だった為。
	c	×	×	旋回の入れ動作に流れている。
	d	×	○	正面支持で身体を支えてから、両足入れを行っている。
	e	○	○	ちゃんとした正面支持はできていないが、許容範囲である。
	f	×	○	完了は明確な正面支持が見られる。
E	a	×	○	正面支持をしてから、両足入れを行っている。
	b	×	△	正面支持の際に馬体に触れているが、手に体重が掛かり支持をしているとは言えず、不明瞭な実施だった為。
	c	×	×	正面ではなくやや回ってしまっている。
	d	×	○	正面支持で身体を支えてから、両足入れを行なっている。
	e	×	△	正面で支持できていない。
	f	×	○	完了は明確な正面支持が見られる。

各審判員の指標は概ね一致しており、「馬体に手が触れたかどうかではなく、体重を手で支えてから〈両足入れ〉へ移行しているかどうか」と考えられる。それにも関わらず、対象者Bと対象者Eの実施に対する各審判員の判定結果は○, △, ×に割れている。対象者Bと対象者Eの実施は「正面支持」を明確に表現したものではなく、審判によって判定が割れても致し方ないものであったように考えられる。

今後、「ドリッグス」に取り組んでゆくにあたっては、対象者Aのような誰が見ても「正面支持」が十分であり、勢いのある〈両足入れ〉へとつなげる実施を目指す必要があると言える。

4. 各審判員が重視した成立条件に関する考察

対象者Aと対象者Dの運動経過が審判員6名のうち2名から、対象者Bが審判員1名からE難度の「ドリッグス」として判定された。その理由として「両手同時着手は見られないが、とび、正面支持において十分な実施と感じたため」や「とびや正面支持が不足しているが認定できるレベルであるため」などの理由であった。E難度で判定した審判員は、FIGが示した「ドリッグス」の成立条件である「明確なとび」、「両手同時支持」、「正面支持」という3つの視点の全てが十分であるからE難度で判定したわけではなく、その実施が許容範囲内であるからE難度で判定していることが示唆された。

対照的に対象者C及びEの実施に対して、審判員6名ともD難度で判定した。どの審判員も「明確なとび」が見られないことを挙げていることから、「ドリッグス」の成立条件として「明確なとび」を優先していることが示唆された。

5. 考察のまとめ

これまでの考察から、現行の「ドリッグス」の成立条件において審判員の判定結果に最もばらつきが出たのは「明確なとび」に対するものであることが明らかとなった。3つの成立基準において

審判員が最も重視するのも「明確なとび」であり、この技の成立判定を巡っては、今後も成立判定に関する問題がつきまとうてゆくと考えられる。一方で、このことは本研究で取り上げた実施がいずれも「明確なとび」を表現したものではなく、技の成立判定が審判によって分かれる曖昧で不完全なものであったことを示唆するものである。本研究で取り上げた実施はいずれも国内選手の実施であったが、国外の選手についてもそれは例外ではなく、誰が見ても明らかに「明確なとび」を表現している実施は、この技の開発者であるキューバの Abel Driggs Santos 選手に限られる。この技が今後普及してゆくためには、Driggs 選手の実施を参考に技術開発に関する研究が進められる必要があると言える。

V. 結語と展望

本研究の目的は「ドリッグス」を意図して実施した運動経過に対し、Newsletter に示された成立基準を用いた場合、日本体操協会公認1種審判員がどのような判定を行うのか、成立判定及びその根拠となる成立判断の基準はどのようなものであるかを明らかにすることであった。その結果、審判員が最も重視するのは「明確なとび」が見られるかどうかであった一方で、その判定基準にはばらつきが生じていることが明らかとなった。このことは、裏を返せば、「明確なとび」を十分に表現できている選手が少ないということでもあり、技術開発の遅れを示唆するものである。

一方、〈とび〉の表現の仕方は多様であることを踏まえれば、「両手同時支持」ということを〈とび〉という規定詞の成立条件に持ち込むべきではなく、あくまで理想像からの逸脱として実施減点等で対処すべきであると考えられる。「両手同時支持」という成立条件が新しく制定された背景やその経緯については明文化こそされていないものの、本研究で明らかとなったように「明確なとび」に関する判定基準が統一されていないことがその一因として考えられる。また、「ドリッグス」に

限らず、採点規則の「客観化」, 「簡略化」が推進されていること（山下・佐野, 2022）も関係していると考えられる。しかしながら, 「両手同時支持」を成立条件に持ち込んだ場合には, 上述の通りの問題が生じることは明白であり, 成立条件からは除外すべきである。

現状においては判定結果にばらつきの生じる「明確なとび」という成立基準については, これ自体が「技の運動経過におけるさばき」（金子, 1974）を規定したものであり, その成否の境界線を明確に引けるものではない。一方で, 「明確なとび」という成立条件が, 「ドリッグス」と類似する技の区別の機能を担っているということは明白であり, この成立条件を取り払ってしまった場合には, 「ドリッグス」という技の独自性が確保されなくなってしまう。それ故, コーチングの実践現場においては, 誰が見ても明らかに「明確なとび」と判定できるような技術開発を進めてゆく必要があると考えられる。

注釈

- 1) 採点規則の技名からの引用や略語（「ドリッグス」など）の場合は「」を使用することとする。
- 2) 金子（1974）の表記論に基づく運動の表記は山括弧を使用することとする。
- 3) 「ドリッグス」の技名には, 〈両足抜き〉の間に移動を行うということは規定されていないものの, 本論の執筆時点において〈両足入れ〉の間に両手の支持場所を移動させる運動経過を実施する選手は確認できていない。そのため, 本論においては「ドリッグス」は〈両足抜き〉の間に支持場所を移動させる技として考察を進めてゆくこととする。
- 4) 比較を行いやすくするために, A 選手の映像を反転処理した。

参考文献

- FIG (2021) 2022 – 2024 CODE OF POINTS : 73.
https://www.gymnastics.sport/publicdir/rules/files/en_MAG%20CoP%202022-2024.pdf (閲覧日 : 2021年10月9日)
- 金子明友 (1974) 体操競技のコーチング. 大修館書店 : 45-59, 176-177, 179-180.
- 日本体操協会 (2017) 採点規則男子2017年版 : 31, 82, 83, 186, 192, 196, 197.
- 日本体操協会 (2018) 男子体操競技情報26号別冊 : 1-20.
- 日本体操協会 (2021) 男子体操競技情報29号追加情報1 : 1-2.
- 渡辺良夫 (1993) 鞍馬両足系におけるとび横移動に関する構造体系論的研究. 体操競技研究. 1号 : 43-52.
- 山下龍一郎・佐野智樹 (2021) 体操競技の技名に関する表記論的縁取り分析. 九州共立大学学術情報センター. 研究紀要. 4号 : 29-36.
- 山下龍一郎・佐野智樹 (2022) 「すべての旋回技の開始と終了は正面支持である」という規定の問題性. 公益財団法人日本体操協会情報医科学アンチドーピング委員会研究部. 研究部報. 126号 : 9-16.